第17回日本在宅医学会もりおか大会　**一般・指定演題**

（実践報告）抄録用紙

演題名 （全角80字以内）	脳梗塞再発作直後から看取りまで、家がいい、その思いを通して、 ～介護支援専門員に求められる連携を考える～
演者名	阿部　鮎美
所属	社会福祉法人志和大樹会　百寿の郷　介護保険相談所

目的

介護支援専門員は市町村、地域包括支援センター、他関係機関と連携に努めなければならない、また医療との連携に十分配慮しなければならないと運営基準に掲げられているものの、十分でないとも言われている。また地域包括ケアシステム構築における在宅医療介護連携の推進においても介護支援専門員の重要性が求められている。そこで今回、脳梗塞の再発作直後から在宅で看取りまで行った事例を通じて介護支援専門員としての多職種間の連携を中心とした活動を報告する。

実践内容と効果

脳梗塞発症直後より救急搬送せずに金銭的に厳しいが、家でできるだけのことはしたいという意向を医師に伝え、往診依頼するところから始まり、薬局、訪問看護・リハビリ・介護・入浴、福祉用具業者と関わりを広げ、それぞれの勤務体制や受け入れ状況を確認したうえでやりやすい方法（メール・ファックス・連絡ノート・面談）で連絡を取り合えるよう、また得た情報は関係者へ伝達報告を行っていった。更に病状進行によるケアへの不安の声が聞かれたため、医師に状況を報告し対応方法を確認し周知しながら、ご家族の思いをスタッフへ共有することで理解得、動揺することなく緩やかに看取りの時をスタッフご家族とともに迎えることができた。

考察

対象者がそこで（家）で暮らしたいという思いを実現、維持してゆくため、関わる介護・医療従事者の特徴を把握し連携相手に合わせた柔軟な姿勢でそれぞれがやりやすい方法で連絡を取りやすいようにすること、また互いの情報を共有化し連帯感が高まっていくよう取り計らうこと、更には看取りに対する思いをスタッフへ伝え理解得ることで、皆で同じ目的に向かっていくという意識を高めること、このように多職種間において支援環境の調整と関わりを普段の生活の場に組み込んでいくコーディネート力が介護支援専門員に求められる連携と考える。